

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 資料紹介 茨城県稲敷市 椎塚貝塚土偶

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 佐賀, 桃子, 大木, 美南, 伊藤, 佑真<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001930">https://doi.org/10.57529/00001930</a>                                       |

# 茨城県稲敷市 椎塚貝塚の土偶

佐賀桃子<sup>1)</sup>・大木美南<sup>2)</sup>・伊藤佑真<sup>3)</sup>

## 1. はじめに

國學院大學研究開発推進機構学術資料センターでは2014年度に縄文時代の土偶89点を新たに収蔵した。これらは明治期から昭和初期にかけて関東地方を中心に収集されたもので、縄文時代後・晩期に比定する資料が多い。多くの資料には遺跡名と考えられる注記や、採集年月日が記されたラベルが貼られている。その中には、椎塚貝塚や立木貝塚、北方貝塚などの学史的に著名な遺跡名が確認できる。本稿では茨城県椎塚貝塚の土偶に焦点を絞り、本学所蔵資料1点と新収蔵資料3点を加えて紹介する。

## 2. 椎塚貝塚の概要

**椎塚貝塚について** 椎塚貝塚は茨城県稲敷市(旧江戸崎町)椎塚に位置する純鹹貝塚である(第1図)。霞ヶ浦西岸の小野川右岸河口付近の東方向に延びる半島状の細長い台地上に立地し、標高27mほどの台地平坦部や傾斜部に貝塚が確認されている。出土遺物から縄文時代中～晩期に形成された貝塚であると考えられる。

椎塚貝塚は明治26(1893)年に坪井正五郎・八木樊三郎らによって発見され(坪井1894)、同年には八木樊三郎・下村三四吉により日本で初めて層位的な発掘が行われた(八木・下村1893)。椎塚貝塚では土器のほかにも土偶などの土製品、石器や骨角器などの出土資料も多く、古くから多くの研究者によって調査や遺物の採集が行われている(八木1894など)。



第1図 椎塚貝塚の所在地

昭和24(1949)年には慶應義塾大学中等部が貝塚南端部を発掘し、多量の土器・土偶・骨角器が出土した。さらに、昭和43(1968)年には明治大学考古学研究室の地形測量調査により、貝塚が5ヶ所に点在することが確認された。

**椎塚貝塚出土の土偶** 椎塚貝塚の土偶については、瓦吹堅が大阪市立博物館30点以上、東京大学総合研究博物館35点、慶應義塾大学考古学民族学研究室21点、國學院大學博物館1点と報告している(瓦吹1990)。大阪歴史博物館では椎塚貝塚と、それに隣接している福田貝塚の土偶を合わせて100点以上収蔵しており、そのうち椎塚貝塚の土偶36点が報告されている(瓦吹2012a・b)。内訳はハート形土偶2点、ミミズク土偶1点、山形土偶33点である。東京大学総合研究博物館が所蔵する35点のうち29点が山形土偶で、このうち4点は中空である。その他にはミミズク土偶や屈折像土偶、亀ヶ岡式土偶などがある(磯前・赤澤1991)。慶應義塾大学の収蔵する資料は21点のうち6点が図化され、このうち5点が山形土偶である(武内2007)。さらに、同志社大学歴史資料館所蔵の山形土偶が1点報告された(小島2004)。これらの資料に今回紹介する本学所蔵資料が加わる(第2・3図)。

### 3. 資料の概観

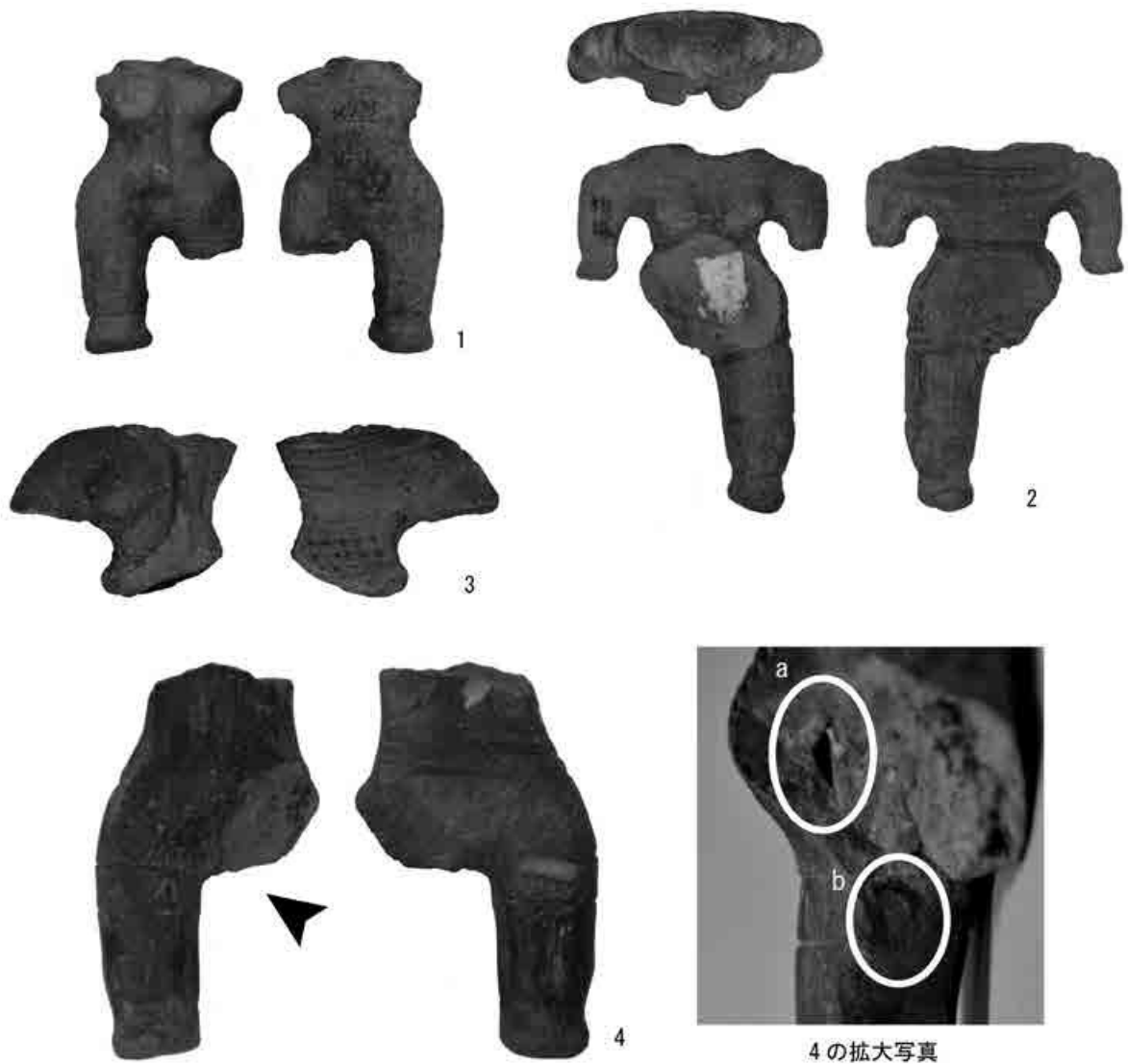
第3図1は本学既存資料で、瓦吹が報告している(瓦吹1997)。詳細は不明だが、大場磐雄の寄贈資料とされており、本資料の写真資料も残っている。この写真の裏には「国大蔵 昭和二十四年」と記載がある。これまで本学での報告がなかったため、改めて報告する。胸・胴・腰・右脚部が残存する資料である。文様は、先端が尖った棒状工具による沈線文を主体とする。沈線幅はいずれも1mm程と細く、浅い沈線である。胴部のくびれに1条の横位沈線が巡り、腰部には8単位の連続弧線文が施文される。弧線文の幅は4~6mm程度だが、胴部中央と背面中央の弧線文は幅が17mm程度で、他のものよりも幅が広い。腰部、脚部の付け根、膝部分には2条の横位沈線が平行に引かれている。腰部以外の沈線は脚部の内側で途切れ、一周しない。正中線は縦位隆帯を胸部から胴部にかけて貼付し、隆帯上に刻目文を施す。摩滅しているため不明瞭だが、下腹部の膨らみの頂点には直径5mm程度の刺突を施しており、へそを表現したものと考えられる。背面は平坦だが、背面の胸の位置が楕円形状に少し膨らむ。右脚部の爪先部が上に反り、脚部の裏は膨らむため自立しないものと考えられる。

2は腕・胸・胴・左脚部が残存する資料である。全体的に扁平に成形され、乳房と下腹部の膨らみを粘土の貼付けによって表現している。文様は横位沈線文を主体とする。2条の沈線により左右の肩部をつなぐ横位の緩やかな弧線文を描く。乳房直下には横位沈線が1条引かれているが、下腹部の膨らみ部分が剥落しているため一周するか不明である。左腰部には3条の短沈線が密接して施文される。弧線文の可能性も考えられるが、腰部の文様はこれ以外にみられないため、文様か調整痕か不明である。脚部の付け根と膝、脚首の1にそれぞれ1条の横位沈線が巡る。いずれも一周せず、脚部の内側で途切れている。ミガキは沈線を施文した後に施している。全体的にミガキが施されているが、側面部分は荒く、乾燥が進んだ状態で施した可能性がある。頭部は欠損しているが、頸部の破損面は丸みを帯びており、頭部と胴部を別に作った後に接合したと考えられる(第2図2)。脚部は内湾しており、脚の裏は窪む。

3は肩・胸・胴部の右半身の破片資料である。文様は沈線・縄文・刺突文を主体とする。胸部から肩

部にかけて3条の横位沈線を引く。また、乳房直下から肩部にかけて2条の沈線を施す。これらの沈線を施文後、肩部から背面の脇にかけて2条の沈線を施文する。胴部には2条の横位沈線上に連続して刺突を施す。正中線は縦位隆帯で表現され、隆帯脇から乳房に向かって横位の刺突列を施す。背面は緩く下を向く弧線文を描き、沈線間に単節縄文LRを横位に回転施文している。しかし、4条目と5条目の沈線間には縄文が施されていない。3～6条目の沈線の端部には刺突が施される。また、頸部と腰部には列点文が施文される。胴部には3条の横位沈線上に刺突を施す。頸部の破損面は平坦だが、胴部の破損面は中央に抉れるように破損していることから、複数の粘土塊を接合して成形したと考えられる。背面は平坦に調整している。

4は胴・腰・右脚部が残存する。文様は磨消縄文が主体である。沈線幅はいずれも3mm程度である。脚部付け根に平行する2条の横位沈線を引くが、脚部の内側で途切れ、一周しない。背面には八の字状の沈線を施し、腰部に平行する2条の沈線を引く。脚部の沈線は背面から正面まで引かれるのに対し



第2図 資料写真

て、腰部の背面の沈線は正面まで及ばない。また、腰部の右側は側面まで沈線が引かれるが、左側の側面には施されず、背面の平坦部のみに限られる。さらに、左側面にはミガキも施されず、ナデのみである。八の字状沈線の外側と2条の沈線区画内に単節縄文LRを数回に分けて横位・斜位に回転施文する。腰部と大腿部に横位沈線を1条ずつ平行に施し、その区画内に縄文が転がされる。胴部中央に3列の刺突による列点文を施す縦位隆帯が貼付され、正中線を表現する。全体的に丁寧なミガキが施されている。胴部を成形後、上から粘土をかぶせるようにして下腹部の膨らみを表現したのか、胴部の破損面に幅10mm、高さ4mm程の空洞が観察できる(第2図拡大写真a)。背面はほぼ平坦に成形されている。股間や脚の付け根の内側はほとんど調整されていない。脚の付け根はヘラ状工具で縦位や斜位に調整を行ない、股間を作出した痕がみられる(第2図拡大写真b)。脚の裏は凹凸があり、自立しないと考えられる。

#### 4. 山形土偶の編年的位置づけ

以上の形態・文様の特徴から、本資料はいずれも加曾利B式土器に伴うとされ、従来「山形土偶」と呼ばれてきた土偶である。

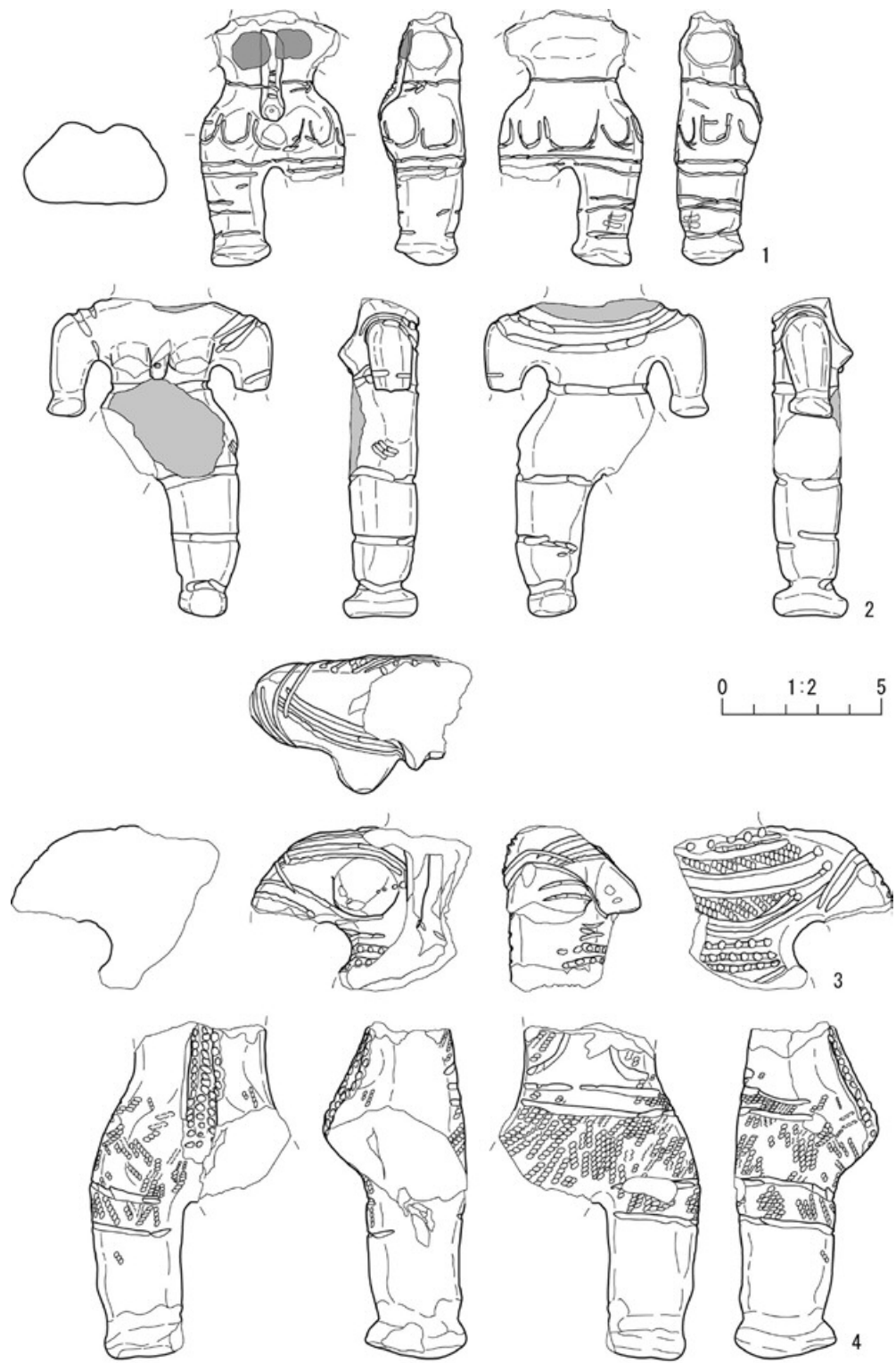
**山形土偶の編年** 山形土偶の編年研究は、これまで小野美代子、瓦吹堅、上野修一などにより行われてきた。小野は土偶の頭部形状や全体の形態から土偶形態の変遷の整理を行なった(小野1981)。

瓦吹は椎塚貝塚の土偶をまとめ、その特徴として沈線文を多用し、胴部に鋸歯状文や弧状の文様を描き、縄文を施文しないことを指摘した。そして、これらの特徴をもつ土偶は山形土偶のなかでも古い段階のものとして位置付けた。次に、福田貝塚などの縄文を施文する例を挙げ、沈線を主体とする土偶とは若干の時間差をもち、沈線文を主体とする一群に後続するものと想定している(瓦吹1997、2012a・b)。

上野は土偶のみの検討も重要であるとともに、土器文様との対比を通じた変遷の把握の必要性を指摘した。また、それらの差異が地域性を反映する系列の違いなのか、時間差であるのかを検討するために山形土偶の類型化を行なった。そのなかで、沈線文を主体とする一群を椎塚系列、磨消縄文を施す一群を福田系列、列点文を多用する一群を金洗沢系列、列点文を主体に背面に渦巻文を描く一群を後藤系列として4つの系列を設定した。これらを土器文様との対比や出土層位、共伴した土器との検討から加曾利B2式～曾谷式期にかけて製作され、それぞれの系列ごとに変遷を追えることを指摘した。土偶の形態や文様の違いを単なる型式差ではなく、異なる系列のものとして評価した(上野1991)。

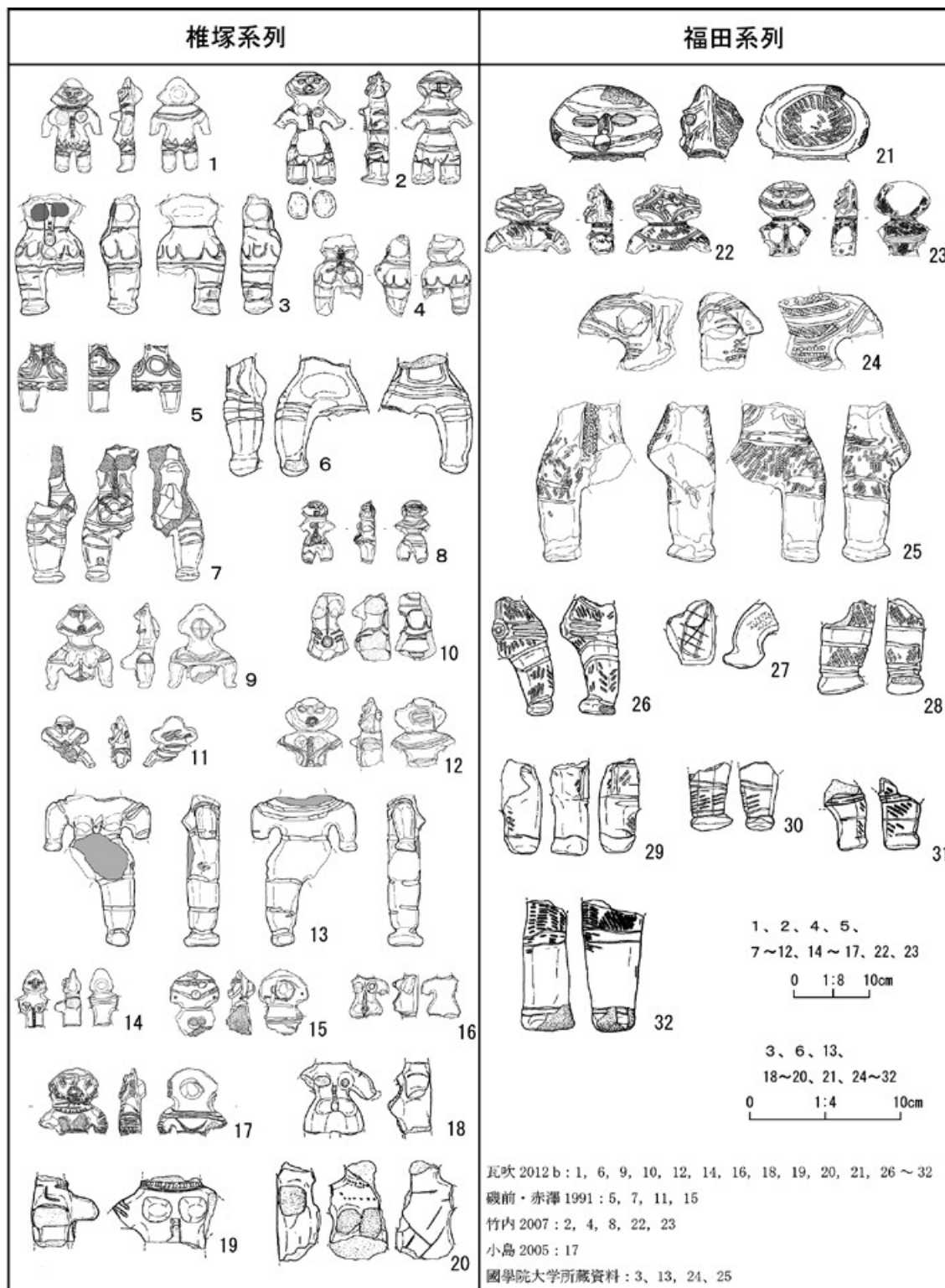
阿部はこれらの研究を踏まえつつ、土偶を用いた縄文社会の実態を明らかにすることを目的とした研究を行なっている(阿部2007、2014など)。千葉県で出土した山形土偶を中心に、これまであまり取り上げられてこなかった粗雑なつくりの山形土偶に着目した。土偶の大きさや調整・文様の精粗の違いから、大型で縄文を施文するA類、A類よりも小型で縄文をほとんど施文しないB類、B類よりも小型で背面の表徴性に乏しいC類の3つに分類を行なった。同一の遺跡内に複数の類型が存在すること、類型ごとに変遷を追うことができることから、土偶を多量に保有する遺跡における土偶の複合性を指摘した。

**当資料の編年的位置づけ** 今回報告した資料はいずれも中実土偶である。形態・文様からいずれも加曾利B2式からB3式期に帰属するものと考えられる。これまでの山形土偶の型式編年研究と対比すると、



| 番号 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) | 備考                 |
|----|----------|----------|---------|--------|--------------------|
| 1  | 8.0      | 4.5      | 2.8     | 72.0   | 沈線文主体。椎塚系列と考えられる。  |
| 2  | 10.1     | 7.0      | 2.7     | 101.0  | 沈線文主体。椎塚系列と考えられる。  |
| 3  | 5.2      | 6.9      | 4.3     | 100.0  | 縄文を用いる。福田系列と考えられる。 |
| 4  | 14.0     | 5.8      | 4.4     | 166.0  | 縄文を用いる。福田系列と考えられる。 |

第3図 椎塚貝塚の土偶



第4図 椎塚貝塚の土偶 集成図

第3図1・2は沈線のみの方様のため、上野分類の椎塚系列と考えられる。3・4は磨消縄文を用いるため、福田系列であると考えられる。また、阿部が行なった大きさと方様による分類では1・2はB類、3・4はA類に分類できる。両者の設定した系列は合致しており、当資料も大きく外れるものはない。

また、これまで報告されてきた椎塚貝塚の土偶のうち、形態や文様がわかるものを集成してまとめた(第4図)。上野の分類に基づき椎塚系列・福田系列に分類したところ、椎塚系列が20点、福田系列が12点であり、金洗沢系列や後藤系列のものは確認されなかった。

**今後の見通し** 当資料は山形土偶の研究において注目されてきた椎塚貝塚の資料である。また、残存状態も良く、資料的価値は高い。

本稿ではこれまでの研究に基づいた基礎的な資料紹介となってしまった。本学で新たに収蔵した資料の多くは山形土偶である。今後はそれらの資料の基礎的な整理を通して山形土偶とそれを製作した集団の様相の検討が課題である。

## 謝辞

図版の作成に関しては小林美貴氏に協力していただいた。文末ではあるが、感謝を申し上げます。

## 引用・参考文献

- 阿部芳朗 2007 「山形土偶の型式と地域社会 ―土偶の型式と技術にみる多層構造―」『縄文時代』第18号 83-105頁
- 阿部芳朗 2014 「縄文時代における長期継続型地域社会の形成と土偶祭祀ネットワークに関する研究」『明治大学人文科学研究紀要』第75冊 195-216頁
- 磯前順一・赤澤威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵縄文時代土偶・その他土製品カタログ』東京大学総合研究資料館標本資料報告 第25号 東京大学総合研究資料館
- 上野修一 1991 「北関東地方における後・晩期土偶の変遷について(下) ―栃木県藤岡町後藤遺跡出土土偶を中心として―」『栃木県立博物館研究紀要』第8号 19-37頁
- 小野美代子 1981 「加曾利B式期の土偶について」『土曜考古』第4号 土曜考古学研究会
- 瓦吹堅 1997 「山形土偶 ―椎塚貝塚の様相―」『土偶研究の地平』1 土偶とその情報研究会 127-148頁
- 瓦吹堅 2012 a 「土偶多出遺跡の様相 ―椎塚貝塚・福田貝塚―」『土偶と縄文社会』雄山閣 125-138頁
- 瓦吹堅 2012 b 「椎塚貝塚・福田貝塚の土偶」『共同研究成果報告書6 高島多米治と下郷コレクションについて 福田貝塚・椎塚貝塚編』大阪歴史博物館 36-39頁
- 小島孝修 2005 「歴史資料館所蔵の縄文時代土偶」『同志社大学歴史資料館館報』第8号 33-44頁
- 武内博志 2007 「慶応義塾大学所蔵の土偶について ―茨城県内出土資料の紹介―」『史学』76巻1号 慶應義塾大学文学部三田史学会 83-129頁
- 坪井正五郎 1894 「常陸國椎塚貝塚」『東洋學藝雑誌』第53号 東洋學藝社 339頁
- 八木英三郎・下村三四吉 1893 「常陸椎塚介墟発掘報告」『東京人類学会雑誌』第8巻第87号 336-389頁
- 八木英三郎 1894 「椎塚介墟第二回の発掘中に得たる土偶に就て」『東京人類学会雑誌』第9巻第89号 320-325頁

- 1) 國學院大學大学院文学研究科 博士課程前期
- 2) 國學院大學文学部史学科
- 3) 國學院大學文学部史学科 卒業生